

研究資料

珊瑚会資料集(補遺)

菊屋吉生・塩谷 純編

本資料集は、『美術研究』前号の「珊瑚会資料集」(菊屋吉生・塩谷 純編)に収録できなかった珊瑚会に関する文字資料、および珊瑚会展覧会出品作の図版を集成したものである。珊瑚会の解題・論考、および本資料集の凡例については、『美術研究』前号の「珊瑚会資料集」、および本号の菊屋吉生「珊瑚会論考」を参照されたい。なお【出典不明】とある資料は、東京芸術大学所蔵の『新聞切り抜き帖』に記事として貼りこまれているが、その掲載紙・掲載月日を明らかにしえないものがある。

第一回展 会期・大正四年四月二日〜三日

会場・上野広小路・いとう松坂屋

□珊瑚会第一回展覧會 去る十五日より上野廣小路松坂屋いとう呉服店に於て、開會す可き筈の同會は、會場の都合に依り延期し、來る廿一日より三十日迄、同店に於て、開催する事に變更したるが同會同人、池田永治、小川芋錢、川端龍子、鶴田吾郎、名取春仙、山村耕花、平福百穂の諸氏の出品仲々の多數なりと。

【中央美術界】『美術週報』二二—二八 大正四年四月

▲珊瑚会第一回展覧會を廣小路いとう松坂屋に観る、川端龍子氏のもののみな桐板に動物を描いてゐるが日本室向きの裝飾として相應しいもので又極めて輕快な筆致をもつてしてゐる就中「鳥猫」は優れてゐる、池田永治氏も例のスケッチ風な達筆

を思ふ存分にふるつてゐる、名取春仙氏の「たちばなとり」は六曲屏風で描法も色彩も至極心持よく裝飾畫として先づ成功に近いものである軸物も氏一流の輕いもので「騰雲」「喧嘩」「烏賊などそれぐに興味深いものである、山村耕花氏は僅か二點であるが「雀の子」の小品は觀者の目を惹く、小川千甕氏は當世風俗畫に思ひ切つて新味を見せ、平福百穂氏亦「松八趣」にゆつたりした上品な腕前を見せてゐる、鶴田吾郎氏の五點は何れも朝鮮の風俗を描いたもので「耕作」「江畔」「浦濱」など殊に捨て難いものである(三十日まで)

【春の繪畫】『東京日日新聞』大正四年四月二六日

第二回展 会期・大正五年四月一日〜七日

会場・京橋・琅玕洞

「東京近郊」といふ課題の下に作られた同人の創作展覧會であつた。吾郎氏の「犬」と「錢湯」とが並んで懸つて居る。どちらも面白い。他に同じ人の「寒空」「柄杓」「ヂヤガいの植つけ」の三つがあつた。龍子氏は四角な絹に「貫つた葱の始末」と「田に落ちて來た犬」の二つを畫て居た。恒友氏の作が二つ、共に無題。郵便配達夫が田舎道の傍に憩うて居るのが、面白い處を捕まへた。千甕氏のに「四ツ木」と「霜の朝」と、「四ツ木」はよく場所の氣持が表はれて居ると思つた。永治氏は「千住」「日暮里」「田端」「向島」を色紙に「葭」「水藻」を半切に畫いた。春仙氏は「草花店」「貸馬」耕花氏は「佃島」「品川」「日向」課題外「銀座」の四點を出して居た。百穂氏は「巡拜者」「搾乳場」に實に達者な筆を見せ芋錢氏の「春の卷」は場中第一に推すべきであつた。

【珊瑚会第二回展覧會】『繪畫清談』四—四 大正五年四月

第三回展
会期：大正六年五月一五日～二五日
会場：日本橋・白木屋

第四回展
会期：大正七年五月二四日～三〇日
会場：上野・松坂屋

六郷暮雪

池上晩鐘

羽田帰帆

笠森夜雨

海上秋月

挿図1 小川芋銭《肉案》 茨城県近代美術館蔵

鈴森晴嵐

鮫洲夕照

挿図2 川端龍子《大森八景》『龍子画集』（精華社 大正9年）より

がい、芋錢の「抱甕痴」は此頃での目につくものだ、池田永治のものには妙味に乏しい、耕花の「鏡を持つ女」はあうらかに美しい出来である、春仙の「緑の中の光」の努力は失敗である、旅中の百穂とハルピンの鶴田吾郎の作は初日には見られなかった、恒友の作は優れてゐるが森田としては平凡である、さて龍子の大作「鶯花暁色」はぐんじょうの氣分を畫面に流して集注點を見棄てた處に大なる情趣が沸く、形や色、塗り方にも作者の撓まぬ努力を見る、但しぐんじょうの色加減に猶一工夫欲しい、「試作東京」といふ會員の出品は何れもそれぐに面白く「東京新風景」として此方が今度の立派な特色である（十五日まで）

【「珊瑚會展覽會」『東京日日新聞』大正八年四月一四日】

挿図3 平福百穂《神語》 秋田県立近代美術館蔵

第五回展 会期…大正八年四月一日〜一五日

会場…日本橋・高島屋

其五回目を十一日よりたかしまやに開く、浩一路の紙本數點があるが「林間歸樵」がい、出来である、併し「白砂青松」の傾向にありたいと思ふ石塚翰の作では「牛」

挿図4 川端龍子《鶯花暁色》『龍子画集』（精華社 大正9年）より

「珊瑚會展覽會」は第五回を十五日迄高島屋に、「白木屋洋畫展覽會」は第二回を十六日迄開催中だ。「東京」の景物を畫材として會員の試作を發表してゐる珊瑚會では、芋錢氏の「芙蓉洲地」（芝浦）千甕氏の「鎧橋」、龍子氏の「光風」（日比谷公園）恒友氏の「武藏野三景」、石塚翰氏の「晚鐘」（お茶の水）等に各作家は特長を發揮してゐる。浩一路氏の「姥子早春」と「林間歸樵」、白砂青松の双幅、龍子氏の二曲一双「鶯花暁色」、石塚氏の「瓦焼く」永治氏の「惜春畫卷」、恒友氏の「釣橋」「青葉」等の外、春仙、耕花氏の近作も見えて居り、腕揃ひだけあつて流石に觀應へはあるが何となく物足りない。

【「珊瑚會と白木屋の洋畫」『讀賣新聞』

大正八年四月一四日】

第八回展 会期：大正十一年一月二日～二九日

会場：日本橋・三越

或る意味で无声會の後身とも見られて来た日本畫の團體「珊瑚會」は平福百穂、森田恒友、山村耕花、小川芋錢、小杉未醒、小川千甕、川端龍子、鶴田吾郎、池田牛歩、石塚翰、近藤浩一路氏等選ばれた作家ばかりを會員としてゐるが◇今回新進の青年作家酒井三良君を新會員として迎へ入れる事となり今秋十月三越で第八回展覽會を開催する◇酒井君は會津在の人で芋錢氏とは郷黨の後進と見るべく大正八年第二次回國展に『雪に埋れつ、正月は行く』が入選したのが抑も君の美術界への踏出しで昨年第八回院展入選の「災神を焼く残雪の夜」で一層鮮明にその特異な作風を認められた謂はば郷土藝術家である◇君が都會生活を欣ばず會津の山奥で専念繪筆に親んでゐるといふのも畫家とならうが爲めの教育らしい何物も受けず殆んど全く獨學で進んで来たといふのも君を知りその獨創の藝術を見る者の等しく推稱するところだ◇何にしても金鈴社が解散し如水會が潰滅した今日唯一の自由團體「珊瑚會」の今後こそ多事なくてはならない

【「酒井三良君を迎へた珊瑚會の今後」『讀賣新聞』大正十一年六月一七日】

※「時報」(『美術畫報』四五—九 大正十一年七月)に再録

▲珊瑚會は第八回目(廿九日まで)を開いた、こんどは全會員が顔をあはせてゐないが、洋畫出の日本畫家をあつめた團體でなかくい、人達が網羅されてゐる、外國に親しんだ作家、パリで永く飯をくつて、事情が分ると、日本人は日本畫を書く氣になるやうだ、少くも油繪でかいても日本畫をかかうといふやうになるらしい、其極端になつた人、悪感に陥ちた人が邦人洋畫家に澤山ある、それでなくても大家でその傾向に行く人が少くない、川村清雄、藤田嗣治二氏はそれ〴〵に日本畫家だ、近頃は洋畫で見込のなささうな人々が、御きように日本畫をかく、けれどこれらの作家は洋畫の手法や約束が離れ切れない上に、日本畫がチト分りかねた感が多い、こゝに珊瑚會はこれらとは全然違ふ、日本にかういふ會のあるのが誇らしい位だ、龍子氏 牛 は帝展出品畫卷を墨に試みた一描法で別の面白さがある、

第六回展 会期：大正九年一月二五日～二九日

会場：日本橋・高島屋

▲珊瑚會展覽會 來る廿五日から廿九日まで高島屋呉服店に開かる

【「よみうり抄」『讀賣新聞』大正九年一月一三日】

第七回展 会期：大正十一年四月二日～二七日

会場：日本橋・高島屋

蒼空邦畫會第一回と珊瑚會第七回が白木屋と高島屋に開會され會期は廿八日までである(中略)▲珊瑚會は此會から見ると大分樂しみと遊び心で畫かれてゐる、川端龍子の「青山白雲」森田恒友の「山雲帖」は大へん面白い遊び心である、作者の微笑が觀者を直ちに打つ「雲」を課題にした作品がいろいろの題材にあらはされてゐる、小川千甕の「砂丘」「土手の上の稻こき」近藤浩一路の宍道湖や「野火」の目についた會として大體に何だか雜然として見えるのは物足らぬ

【「蒼空畫會と珊瑚會」『東京日日新聞』大正十一年四月二八日】

挿図5 川端龍子《金芽》『龍子画集』(精華社 大正9年)より

「鶏舎」や庭をかいたものにも頼られるやうな、しかつりした楽しさが豊かに味はれる、近藤浩一路、小川千甕、池田永治、石塚翰などの會員作と百穂の「しみづ」が格段の用意がうかゞはれる、いつもやる課題作は、妙題がない時はダメである、何うしても寄席の追出しの藝づくしになり易い。

【美術界】『東京日日新聞』大正一一年一〇月二九日

第九回展 会期…大正一三年二月一日～八日

会場…上野・松坂屋

珊瑚會九回目展

■洋畫から日本畫に突入して今名をなして居る畫家達永治、翰、芋錢、千甕、一平、龍子、吾郎、耕花、浩路、三郎、百穂、恒友君等の珊瑚會は第九回目展覽會を見せてゐる

■元々お金が欲しくても欲しくない御連中だけに、さうして同人展だけに製作は皆熱心且つ詐はりのない自分を曝け出してゐる、夫れだけ面白くもあり純な見るべきものがある

■と云つても必ずしも作品の全部が悉くいゝもの計りだと云ふのではない、又皆どれもこれも技量拔群と云ふ譯ではない、中には可成りうたがわしい技術の持主もあるが然し前にも云つた様に純なところがとてもいゝと云ふのである

■通覽するに一番早く目につくのは一平同人の雜詩十題の諸作であらう、一平君が夫人と同棲してゐながら可成長い間ビューリタニズムを實行して體驗し得てゐる佛敎主義的温情を、然も君の漫筆氣分とを横溢せしめてゐる『戀を知る頃』『女に鯨を見せる』其他を挙げ

■田園生活謳歌畫人に否其體得したる趣味を遺憾なく表現してゐるものに芋錢、恒友兩君のものがある、いづれも田園生活をして來たもの濕浸したものに始めて了解出来る味がある

■こうした特種の趣味に生きてゐる人達以外の諸作に『夕月』之れは川端龍子君の

墨と水金の破綻のない大作君特有の金泥の味を見せ雪國專問の三郎君の『朝』翰君の『犬』之れは往年帝展に同じコレボジーシヨン同じ様な色調の『乳をのむ豚』を想地せしめるものではあるが——人目を引いた(八日まで池の端松坂屋別館)

珊瑚會を觀て

【出典不明】

挿圖6 川端龍子《夕月》『龍子自選集』(大塚巧藝社 大正14年)より

◆さんご會第九回展覽會を池の端の松坂屋別館に觀る會員各自が自由に描かうとするものを描いて居るのが心持がよい新加入の岡本一平氏は雜詩十題で氣を吐いて居るが稍々毒氣があつて當てられる◆鶴田吾郎氏のは「石佛」に苦心のあとがありありと現はれて居る賣るのを目的としない繪は感が何處か異ふ◆酒井三良氏の「花鳥」は鳥が少々硬い朝と夕は夕の方により多く氏の技巧のさえを見る◆森田恒友氏の二作はどちらも詩の境地であるが特に「微雨」により深き自然の詩を味ふことが出來た◆川端龍子氏は二曲一雙の「夕月」を出して居る竹幹や葉の具合は最も手に入つたもの番の鳩をハツキリと描いた明さも合點が出來たがどうも月が繪だなど思はせられた◆石塚翰氏のは試作の「野菜」と「霜」がよかつた

【出典不明】

第一〇回展 会期：大正一三年一月二六日～二九日

会場：日本橋・三越

▽珊瑚會第十回展覽會 廿六日より廿九日まで三越呉服店で

【學藝消息】『東京日日新聞』大正一三年一月二六日

珊瑚會の作では先づ川端龍子氏の秋興小品が目を引く、唐紙を用ゐて、五種に得意の題材を驅馳して居る丈けでも面白い、その中で、私は「菊」が一番好きである、龍膽は朴の枯葉を添べた皮肉な構圖であるが作者の思ふほど一般觀者を引つけ得るや否や疑問である、沙魚も葡萄も面白い、山村耕花氏の作では「蔦の果」最も振ひ、「山母」之に次ぐ、自然の景觀を捉へて自個の畑に移植する手際漸く一轉機を劃せるを見る、注目すべき作と思ふ、鶴田吾郎氏は、水墨を基礎とした風景畫であるが梨畑が一番面白く、浩一路氏の作は三斎と溪仙との味を渾和したやうな器用さ、恒友氏の「麓野初冬」は小品ながら全幅に溢る、詩味を取る 【出典不明】

回想

話が餘談に涉つたが、この年の他の作品の内としては春の珊瑚會に出品した『秋光搖溶圖』『猿酒』の二點が自信のあるものであつた。一方は温泉好きの自分が、頭の中での自然境に女を湯浴みさしたのであつた。『猿酒』の方は聞いたり、讀んだりしてゐるもの、嘗てまだ見たことはないから、これも頭の内での構想であつた。兩圖とも主とした處は、湧き出づる靈泉、天理に應じた果酒の製法、つまり生くるもの、自然禮讚の意に變りは無かつた。

(中略)

この年の秋の珊瑚會に紙本に奔牛を描いた作品『牛』を出品したがこれは本當に即興的——といふよりも、いざ開會となつて場所に空き間があるので、其れを塞ぐ爲めとして、招待日の朝から大急ぎで描き始めて、晝には筆を擱いて午後には陳列し

た間に合はせた、間に合はせ作品であつたのでした。而かも其れが院展の出品よりも可いといふことに云はれたことでしたが、かういふ事は自分にとつては苦笑を禁じ得ない次第である。成る程自分といふものと作品とを切り離して考案する場合には、そこに偶發的な力が、感興的に現はされてゐること、も思ひますが、之れを『つづきの巻』と比較して、それよりも良いと云ふことに成ると、何も努力して制作する程の事は無いであらうと思ふ。說者或は、生みの苦みと、生まれたるもの、何れかが尊いかと云ふかも知れないが、——一握の砂金と一つの坑脈と何れか、自身にとつて尊きかを以て報いたいと思ふ。

若い諸君にして作品を展覽會に送つた場合には、さうした自分の抱く考へと、異つた意味の判斷を受けることも多いであらうが、其れを他山の石として受け容る、雅量も無くては困るが、然し全部的にそれに納得するやうなことがあつては、それはその作者の將來の爲めに深く考へねばならないことである。

珊瑚會には他に『鶏舍』『庭前秋色』の二點が出来た。色彩の方面の傾向では、この年の最後の收獲であつたと考へる。

【川端龍子『畫室の解放』中央美術社 大正一三年四月】